

## 「PBL テュートリアル形式での生理学教育を考える懇談会」報告

近畿大学医学部第2生理 松尾 理

上記名称の懇談会を当番幹事の御好意によって平成13年3月30日午後開催出来ました。昨年秋に実施した将来計画委員会からのアンケートの結果、かなりの先生方が関心を持っておられることが判明した。さらに、アンケートを実施したあとの平成12年11月、文部省の委員会から「コアカリキュラム」が提示され、各大学で医学教育について熱心な討論がなされた。

そのような背景のもとで、既にテュートリアル形式での生理学教育を実施している大学の先生方、および今後の導入を考えられている先生方に集まって頂いて、体験を分かち合うと共に、問題解決の場とすることで、4人の世話人（宮崎俊一（東京女子医大）、山本哲朗（三重大）、森田啓之（岐阜大）、松尾 理（近畿大））が中心になって参加を呼び掛けた。

予め、世話人が討論項目として以下のことを提示しておいた。

- 1 PBL テュートリアル形式での生理学教育実施によるメリットおよびデメリット
- 2 テュータの手配などの人的問題
- 3 講義内容の再編成
- 4 実習時間の確保や実習レポート作成に関わる問題等
- 5 生理学の重要性を学生達に認識させる手立てについて
- 6 テキストや事例シート、評価の事など
- 7 その他

このような準備と呼び掛けに依って約50名の参加者があり、非常に熱心な討論が行われた。以下にその内容を簡単に報告する。

討論項目として参加者が共通にしている問題点を討論しようとしたが、共通項目が汲み上げられ

ず、世話人が所属する東京女子医大、三重大および近畿大学での具体例を参加者に紹介し、発表内容に関連した問題を討論することにした。

三重大ではテュートリアルを3年2学期から4年1学期にかけての1年間のみの実施で、テュートリアルを不合格になると3年2学期へ降格される制度に驚きの声が上がった。

東京女子医大ではテュータが同じグループを3ヶ月間担当するので、個別指導し易い利点が挙げられたが、逆にテュータと学生の相称が悪い場合に問題がある。評価はテュータがつける分だけである。生理学の重要性を認識させるため教養の先生方と一緒に充分の枠をとっていることなどが紹介された。

近畿大学では臨床前医学専門教育を全てPBL テュートリアル方式で行っており、その中で統合カリキュラムとして臓器別でテュートリアルコースを編成している。評価として、テュートリアルの部分、講義の部分、実習の部分を経済評価している。

以上の各大学がかなり独自のスタイルで実施していることが明らかになった。さらに共通的な問題点として討論されたり、質疑応答された内容を以下に記す。

1. 生理学の重要性をどの様に認識させるか？  
コアカリキュラムや統合カリキュラムでは生理学が埋没してしまう。そうなると将来若い人達が生理学教室に来て研究する状態にならないだろう。特に卒後研修が義務づけられると、益々生理学専攻者が減るだろうとの危惧の声が上げられた。これは学会として対処す

べき問題であろう。

## 2. 生理学実習について

従来の生理学実習では2講座が分担して、グループ7～8人の学生に1実習課題を与えるスタイルだったが、これはかなりチュートリアルに近いものだったと発言があった。また、全国全ての大学に共通する問題点は、実習1課題で実習器具が学年で1セットしか無く、チュートリアルのような集中コース的な実習では1学年で少なくとも10～15セットの実習器具が必要である。形態系の実習では例えば顕微鏡が学生1人に1台整備されているのとは、好対象であり、これがハード面での大きな問題である。まだソフト面の問題として実習担当者が従来の半分(1講座で担当するので)になってしまい、必然的に1グループの人数が大きくなり、実習の効果が下がる問題点が指摘された。

## 3. テュートリアルの意義づけ

学生間の情報伝達の旨さから、同じ教材(事例シート)を使う事の問題に対するの討論があった。その際、学年によるチュートリアル

の意義づけが異なり、低学年では問題発見に重点が置かれ、高学年では臨床例のマネジメントやケアに重点がある方向で対応する。いずれにしても、自分で問題発見し、自分で解決する方策を学習するのであるから、上の学年からの資料を貰うことが、本人のプラスにはならない。

## 4. 生理学教育技法についてのon-line journalを現在準備中であり、体制が整えば公表し、生理学会のものにする方向であると、佐久間教育委員会委員長から報告があった。

今後の事について、チュートリアルに関する情報交換の場として今回用いたHP(<http://www.med.kindai.ac.jp/physio2/pbl.html>)を継続して開いておくので、意見を近畿大学 松尾 理 宛にメール(matuo-o@med.kindai.ac.jp)で寄せられたい。また参加者から実際の実験チュートリアルを体験したいとの希望などがあり、来年の大会までに教育委員会と相談し、場合によってはワークショップなどの体験型のプログラムを編成することも検討したい。